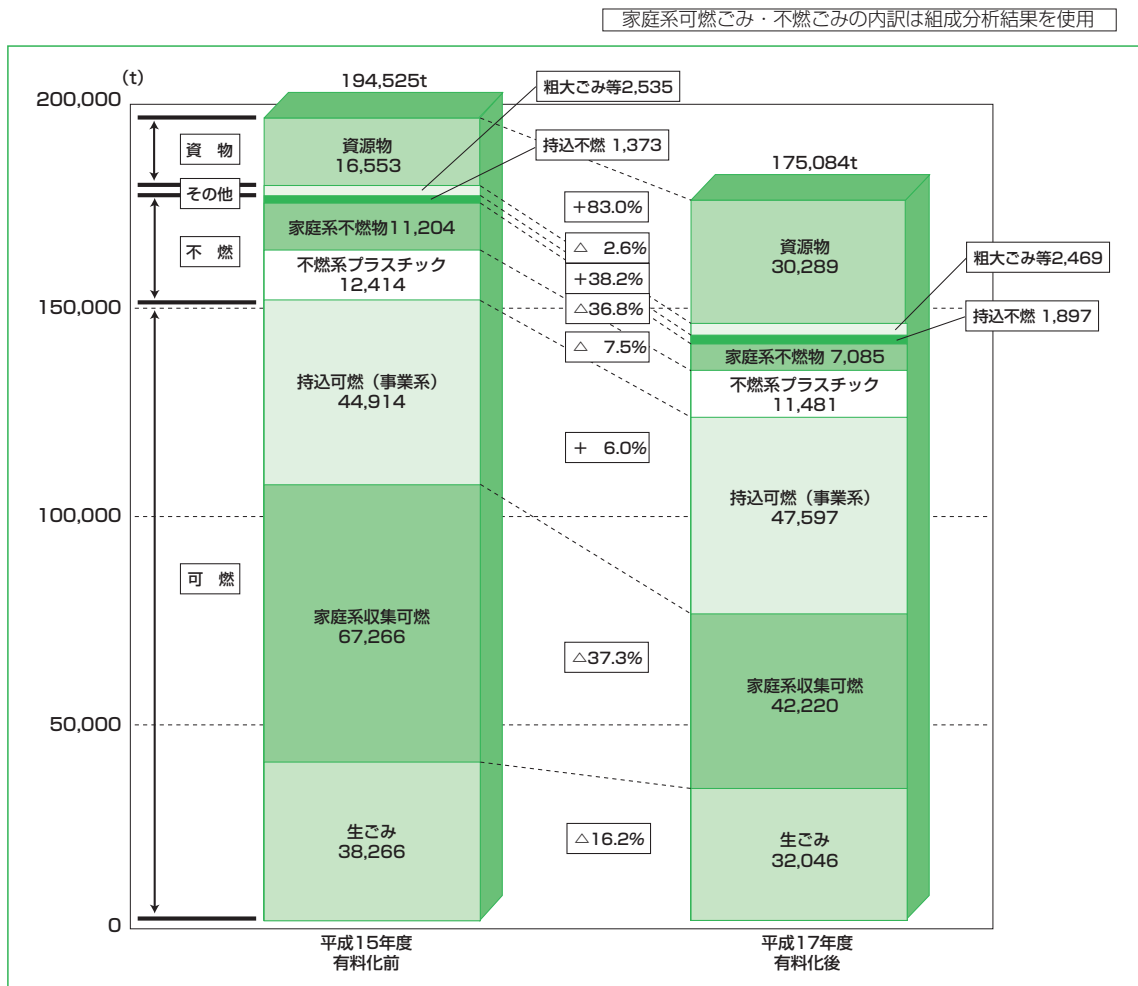


第3章 循環型都市八王子を実現するための現状と課題

1. 循環型都市八王子を実現するための現状

(1) ごみ有料化後の排出状況

ごみ有料化に伴う成果として、年間約19,441トン（対15年度比）の発生抑制効果がみられました。更なるごみ減量を目指していくためには、事業系ごみ、生ごみ、不燃系プラスチックの減量・資源化に取り組んでいく必要があります。



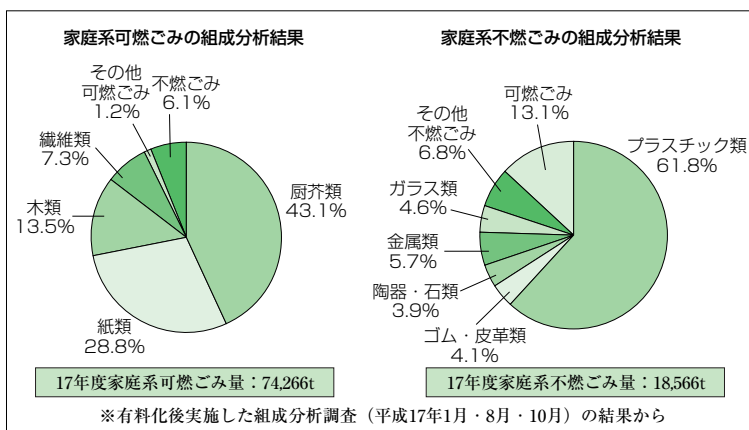
総排出量		発生抑制 (資源物含む)	
平成15年度 (有料化前)	平成17年度 (有料化後)	量	割合
194,525 t	175,084 t	19,441 t	-10.0%
531,015 人	544,675 人		

(2) 家庭系ごみの現状

平成16年10月のごみ有料化を契機に市民の意識の高まりと努力により、当初目標25%を上回るごみ減量を達成、本市は平成16年度実績において50万以上の都市でリデュース、リサイクル率の両部門で第1位という成果を得ることが出来ました。

しかしながら、有料化当初に比べ排出量にリバウンド傾向が見られはじめ、また、組成分析の調査結果では生ごみ・紙類・プラスチック類を中心にまだまだ減量や資源化の余地があることがわかりました。

ごみを発生させないという「発生抑制」の意識をこれまで以上に持ち続けていくために、更なる減量・資源化に向けた施策を新たに展開していかなければなりません。

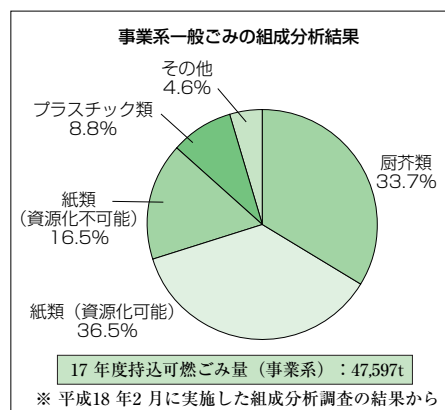


(3) 事業系ごみの現状

事業系ごみは一般生活で排出されるごみとは違い、事業活動の中で発生しているため、最終的な処理やごみ減量への取り組みも含めて事業活動の一環であり、事業者としての責任があります。

大規模事業者では、体系的にごみ減量や資源化に取り組むことができますが、小規模事業者や個人商店では手間や費用等の負担が大きくなり、一事業者のみで取り組むことが困難であるのが現状です。

今後、小規模事業者や個人商店においても、ごみ減量や資源化に取り組めるよう、情報提供やネットワークづくり等の支援策を講じていかななくてはなりません。



(4) 埋立処分場の現状

二ツ塚廃棄物広域処分場は平成18年3月末までに、すでに約106万2千立方メートルが埋め立てられました。これは全体（廃棄物埋立容量約250万立方メートル）の約42.5%に相当する量で、これまでのペースで埋立を行えば平成25年には埋立許容量に達するといわれていました。

新たな埋立処分場の確保が困難な中、平成18年度からエコセメント化による資源化事業を実施していますが、いずれは埋立許容量に達してしまいます。埋立処分場の残余量がひっばくしている今だからこそ、限りある埋立地をできる限り長く使用できるよう、ごみ減量・資源化への取り組みを推進していかなければなりません。埋立処分場が満杯になってしまってからでは遅いのです。



2. 循環型都市八王子を実現するための重点課題

ごみの有料化により、大きな減量の成果をあげることができました。有料化による減量効果を定着させ、更なるごみの減量と、資源化の拡大を図り循環型都市八王子を実現していくために、重点課題を以下のように設定しました。

(1) 家庭系ごみの更なる減量

家庭系ごみについては、有料化により可燃ごみ29.6%、不燃ごみ21.4%、総量で28.1%の減量を実現しました。

ごみゼロ社会の実現を目指し、この減量効果を定着させ、更なるごみ減量と資源化の拡大を図る必要があります。

(2) 事業系ごみの減量・資源化への新たな対応

事業系ごみについては、家庭系ごみに比べ資源化が進んでいない状況にあります。

事業者責任の徹底が第一ですが、ごみを減らしていくためには、事業系のごみであってもできる限り資源化を図っていくための新たな試みを検討する必要があります。



無駄な印刷は控え、紙ごみは資源化にまわしましょう!

(3) 徹底した3Rの推進

ごみの更なる減量と資源化の拡大を図り、循環型社会を形成するため、『ごみを発生させない』を第一とした3Rの基本原則に基づく徹底した取り組みを行なっていく必要があります。



リデュース (Reduce)

リデュースとはごみとなるものの発生自体を抑制することで、循環型社会を形成するためには最も優先すべき考え方です。使い捨て製品や不要な物を購入しない、過剰な包装は断りマイバックを利用する等の活動があげられます。



リユース (Reuse)

リユースとはごみにする前にもう一度使いみちを探り、再使用することです。ものを使い捨てるのではなく、繰り返し使用することでごみを出さない基本的な考え方です。大事なものは物を大切にすることです。



リサイクル (Recycle)

リサイクルとは廃棄物を資源物として再生利用することです。捨ててしまえば、ただのごみとなりますが、回収して再生利用すれば新たな製品に生まれ変わります。ごみ減量ばかりでなく、天然資源の消費抑制にもつながります。